

はしがき

日中関係の歴史のなかで明代（二三六八〜一六四四）はどのようにイメージされているのだろうか。遣唐使、日宋貿易、元寇、長崎貿易……といったキーワードに相当するものはなんだろうか。本書では、それを「遣明船」ということばに求め、その多面的な性格と時期的変遷（第一部）、それを支えたさまざまな個人や人間類型（第二部）、それに乗りこんだ人びとの旅と異国体験（第三部・第四部）、それに積まれて日中を行き交ったモノ（第五部）、その担った外交にともなう文書や儀礼（第六部）という、多彩な観点から、研究の到達点を確認し、今後の研究の指針を探ろうとする。

もとより、一五世紀初頭に端を発し一六世紀中葉までで姿を消す遣明船だけで、日中関係のすべてが語れるわけではない。前史については第一部総説Ⅰで若干言及し、遣唐使と遣明使の異同（第一部各論①）、唐・宋・元から明にかけての渡航僧の性格変化（同各論②）、日元通交との比較（同各論③）にもふれたが、後に続く秀吉の引き起こした東アジア世界戦争から明清交代に至る世界史的激動については、本書に匹敵するもう一冊が必要となろう。だがその一方で、後述のように、遣明船研究は史学の最先端を行く分野であり、これに絞りこんだ視座から日中関係史全体を見渡す試みは、歴史学の新しい波を感得させてくれるだろう。

「編集後記」が述べるように、本書の企画は、私を代表者とする科研費基盤研究「前近代東アジアの外

交と異文化接触——日明関係を軸とした比較史的考察——」および私の東京大学退任に端を発する。しかしながら、本書がカバーする問題領域の広大さや執筆陣の顔ぶれが語るように、それはあくまで機縁にすぎない。相当の時日を費やして、本書を世に問うまでに漕ぎつけることができたのは、編者とその仲間たちの、圧倒的な熱意と卓抜なアイデアと多分野交流のたまものである。その結果、成果をまとめるとかなにかを記念するとかいった域をはるかに超えて、本書は学界に対する野心的な問いかけとなった。そうしたなかで私は執筆陣の後衛の一角を占めるにすぎない。

*

日本↓明という一方向のベクトルをもつ「遣明船」という語が、相互的であるはずの二国間関係のキイワードたりうるのはなぜか。日明外交史を見渡すと、明初の数年間と一五世紀初頭の一〇年ほどは、ほとんど連年のように両国間に使節の交換と往来があつた。こうした相互性は日明間でこそ例外的だが、明が重要な外交対象と位置づけていた朝鮮・琉球との関係においてはむしろ通常であり、こちらこそが典型だといえる（それゆえこの短い例外期を研究する意義は大きいと考えるが、史料の制約もあって充分になされているとはいえない。第二部各論①参照）。ところが日明間ではそれが長続きせず、一方的に日本から使節が渡航するのみの変則的形態が通常となった。しかも一五世紀なかば以降は、一〇年に一回、船は三隻以内という大きな制約の課されたものだった。

明を盟主とする東アジア国際社会のなかで、日本が置かれた位置は特異なものがあつた（むろん、以下述べることは朝鮮や琉球を比較対象とした結果であつて、東南アジア諸国や北方・西方諸国の対明関係との比較は、今後とりくむべき課題である。第一部各論⑤参照）。ユーラシア大陸の東方海上に浮かぶ列島という地政学的位置をおもな要因として、日本には冊封体制の政治的・軍事的・文化的圧力が、朝鮮や琉球に比してはるかに弱くしかおよば

なかった。

日明間の外交関係は、幕府の頂点に位する室町殿を「日本国王」に位置づけることを核心とするが、日本は、国際社会における外見上は被冊封国でありながら、明の暦や年号を国内で使用した形跡がない。独自の暦や年号の使用は天子に対する僭上とみなされても不思議のない行為であって、それゆえ朝鮮や琉球では明のものを使用している。また、朝鮮に対する銀、琉球に対する胡椒や蘇木に例を見るような、明の貢納要求が被冊封国の産業構造を大きく規定するといった事態も、日本では起きていない。

その結果、右に述べた「例外期」を除いて、日本側にとつての日明外交は、貿易によつて「唐物」^{からもの}を手する希有の機会と意識されるようになった。「日本国王」は、天皇をさしおいて室町殿が日本の国制の頂点に立つことを表象するかに見えるが、そうした要素は主観的にも客観的にもまったくなく、むしろ日本の諸勢力のなかで明が唯一合法的と認める貿易の名義として機能するようになった。そして、外交関係に伴つて交付された通交許可証である勘合は、遣明船一隻ごとに一通ずつ携帯することが義務づけられ、明が合法と認めた貿易船であつて海賊船でないことの証拠となった。「勘合貿易」の語がキーワードとして依然有効性をもつ理由が、ここにある（第六部各論⑤）。

*

遣明船に参加した商人勢力の動向や遣明使に起用された人物の背景について分析が進んだ結果、「公方船」の時代から細川・大内の角逐期をへて大内氏独占期へ、といった遣明船の時期区分の通説も、細川一堺商人、大内一博多商人という固定的な相関図も、見直されつつある（第二部各論②③⑫）。商人たちが遣明船に関わる経路は、派遣主体との政治的連携だけではない。彼ら自身の帯びる境界性にも目をむける必要がある。遣明船搭乗商人でもっとも経歴の明らかな楠葉西忍は、「天竺人」と日本女性とのハーフだった

(同各論③)。寧波事件の引き金をひいた細川船の副使宋素卿は、寧波から売られて来た中国人で、多分に商人的な性格をおびている(同各論⑨)。こうした境界性は日本側・明側双方の通事にも認められ、ときには疑いの眼で見られることもあった(同各論⑭)。

大内氏の独占とされる最末期の遣明船についても、大友氏・相良氏のような見逃されていた派遣主体が存在することや、後期倭寇との実体面における差がきわめて小さいことなど、実態解明が急速に進んだ(第一部各論⑦)。秀吉の戦争に帰着するポスト遣明船の時代相にも、着実に光があてられつつある。

遣明船の渡航は貿易機会としてのみ意味をもったわけではない。使節団を代表する正使・副使(第二部各論①④⑧⑩⑪)と、実務の中心となった居座はすべて禅僧であり、居座とならぶ実務者である土官にも、応仁度船の桂庵玄樹のように、禅僧が就くことがあった(第二部各論⑤⑦⑬)。彼らの任務に宗教的色彩は薄く、漢文や中国文化の素養を基礎とする外交能力(第四部各論②・第六部各論③④参照。そこには貢納品の買取価格交渉のような商業的要素もふくまれる)が重要視された。とはいえ、遣明船は日本の禅僧にとつて中国文化と直接接触しうる唯一の機会だったから、室町文化に占める遣明船の意義も見のがせないものがある。

桂庵が帰国後中世・近世の日本における有力な儒学の一派「薩南学派」の祖と目されたことは、その一例であるが、桂庵と同船した雪舟等楊が、渡明を契機に日本水墨画の領域を大きく広げ、後世「画聖」とまで称えられるようになることは、もつともよく知られた例である(第二部各論⑥・第四部各論⑥)。そのほかにも、明の僧や文人に墨蹟、頂相(肖像画)・送別図等の賛、日本の祖師たちの行状(伝記)などの執筆を求める例は枚挙に暇がなく(第二部各論①・第四部各論③④)、九・一〇世紀の人菅原道真が南宋代一三世紀の高僧無準師範に師事したという伝説に基づく「渡唐天神像」が、日中間を往来するといった興味ぶかい事例もある(第四部各論⑤)。

*

歴史学の研究が、新史料の発見や既知の史料の再読によって、予想を超える展開を見せることは少ないが、遣明船研究は諸分野・諸地域のはざまに横たわる研究領域であるだけに、とりわけその様相が濃いように思われる（第一部総論Ⅱ）。従前の遣明船研究は、『善隣国宝記』、三類五種の入明記、『明実録』、『大乘院寺社雜事記』、『滿濟准后日記』などの貴族・僧侶の日記、および五山文学等禪宗關係史料の一部などをおもな材料として、組み立てられてきた。小葉田淳『日支通交貿易史の研究』、田中健夫『中世対外關係史』などの古典的著作は、今なお参照に価する内容をもっている。

しかし、とくに近年東洋史、美術史、考古学等関連分野との相互乗り入れが進み、従来は参照されなかった史料、知られてはいても深く吟味されなかった史料が、探索・使用されるようになった結果、この分野の史料学的・書誌学的研究は急速な進歩をとげた。とくに目立つのは、日本側では禪宗史料、中国側では地方志や文集のより広い利用である。

本書では、外交文書集『善隣国宝記』（第六部各論①）、遣明使の旅日記『笑雲入明記』（第三部各論①）『初渡集』『再渡集』（以上同各論⑤）、明側担当者の交渉文書を載せる『壬申入明記』（同各論④）『嘉靖公牘集』（第六部各論②・第三部各論⑧）、遣明船の準備過程を伝える『唐船日記』（第三部各論②）『戊子入明記』（同各論③）『天文十二年後渡唐方進貢物諸色注文』（第五部各論①）について、個別書目ごとに概要と研究状況を紹介した。そのほかにも、遣明使が往路で上京許可、復路で順風を待つて長期滞在した寧波（第三部各論⑩⑪⑫⑬・第四部各論①②）や、杭州西湖（第四部各論⑧）を筆頭とする沿路の観光名所（第四部各論⑦）については、それぞれの地方志が存分に参照されている。

こうした史料の調査・研究・輪読にあたっては、科研費の恩恵にあずかることきわめて大きく、先行す

る活字本で周知の史料についても、原本に即したより正確な翻刻を提供したり、活字本に漏れた関連史料をあらたに紹介したりという成果が上がっている。本書がそれに全面的に依拠していることはいうまでもない。特筆すべきは、大日本仏教全書や牧田諦亮たいていりやうの著作によって利用されてきた、天龍寺妙智院所蔵の「策彦入明記録及送行書面類」という総名が付された史料群である。前出の『初渡集』『再渡集』『壬申入明記』『戊子入明記』『天文十二年後渡唐方進貢物諸色注文』はいずれもこの史料群の一部をなすものだが、本書では妙智院所蔵原本および東京大学史料編纂所架蔵写真帳に依拠して、新しい知見を盛りこんでいる（第一部総論Ⅱ参照）。その他主として「送行書面類」に属する諸史料についても、未紹介史料やテキストの根本的修正が少なからず、そこから「虚構の詩序」のような未知の「文化交流」が明るみに出された（第四部各論①・総説）。

*

遣明船研究は、空間的には日本と中国、さらにはアジア諸地域にまたがり、テーマ的には外交、貿易、宗教、文化交流など広い範囲におよぶ。それゆえ、日本史と中国史・朝鮮史・琉球史等とのクロスオーバー、および、美術史・考古学・文学を始め、船舶・服飾・仏教・儒教等々の学問分野をとりこんだ学際的アプローチが必須である。本書では、科研費共同研究メンバーの延長線上に、思いきって各分野の専門家に協力を求め、充実した執筆陣を編成することができた。

まず中国史研究に関しては、近年進展がめざましい明清代史研究の成果を吸収することに力を注いだ。従前の研究には、遣明使側の動向に比して受入側の明の諸制度や人物への目配りが足りないという弱点があった。そこで本書では、指定受入港である寧波での蕃国使迎接体制（第三部各論⑩）、中国大陸の南北幹線交通路を管理する水・陸の駅制度（同各論⑫）、首都における蕃国使の宿舎会同館（同各論⑬）を詳細に論じ

ることで、闕を補うよう勉めた。あわせて、双方を往来した文書を明代の公文書体系のなかで捉えるべく、表文、勅諭・誥命こうめい、勘合・咨文しがん、印章の各項目を設定した（第六部各論③～⑥）。また、遣明使の交渉相手となった官僚については、嘉靖年代の浙江巡撫朱紳しゅんを代表例としてとりあげた（第三部各論⑧・第六部各論②）。

遣明船研究は日明二国間でつきるものではない。明と外交関係のあつたアジア諸国、とりわけ朝鮮・琉球との比較研究は、日明関係をより客観的に捉えるうえで有効である。それを存分になしえたとはいえないが、高麗・朝鮮の遣明使との比較（第一部各論⑥）をはじめ、明から賜与された印章の使用について日朝を比較したり（第六部各論⑥）、琉球の事例を参照して日明冊封儀礼を復元したり（同各論⑧）など、端緒は随所に見られる。

日明を行き交つた多種多様なモノをとりあげた第五部では、とりわけそれぞれの専門分野の研究を参照することが欠かせない。主要な品目として、輸出品では馬、硫黄、屏風・扇、日本刀を（各論②～⑤）、輸入品では香料・香辛料・染料・薬材、絹織物、書画、唐物陶漆器、陶磁器、銅銭を（各論⑥～⑩）、それぞれ立項したが、屏風・扇、絹織物、書画、唐物漆器、陶磁器について、美術史・考古学の専門家に執筆を依頼した。むろん、文献史学の側から勇氣をもつて「モノ」研究に踏みこんだ項目も多く立てられている。

薬種輸入の重要性は医学史の観点からも注目されるが、遣明船に乗りこんだ医者という論点（第二部各論⑮）とも深く関わるところだ。銅銭が室町期の日本社会に占める地位については古来議論があるが、日本での模造銭鑄造の実態を中心に、近年急速に研究が進展している（第一部各論④・第五部各論⑪）。そのほか、遣明使了庵桂悟と王陽明との邂逅を思想史の立場から論じたり（第四部各論⑨）、「装い」の視点から足利義満の冊封儀礼を検討したり（第六部各論⑨）という項目からも、学際的アプローチの有効性を見てとることができよう。

科研費により実施した現地調査の成果をふんだんに織りこんだことは、本書の大きな特徴のひとつである。調査は、遣明使が寧波から北京までを往復した旅を、『笑雲入明記』と『初渡集』をガイドブックとして（むろん事前に当該部分を精読したうえで）、可能なかぎり忠実にトレースする方針で実施された。もとより一度の調査で全行程をこなすのは不可能で、数年間にわたり数個の区間に分けて、しだいに北京へ近づいていった。

近年の中国の高度経済成長がひきおこした景観の変貌はすさまじいものがあり、過去への接近の困難さに歎息することもしばしばだったが、地名を記したプレートなどかすかな手がかりから過去の感触が得られて歓声をあげることもあった（周囲の眼には異様に映ったことだろう）。長江より北の部分では、かつての運河ルートが不分明になっている箇所が多く、それを探して彷徨した。その一方で、遣明使が長期滞在した寧波城内や南京・北京、憧憬の的だった杭州・西湖については密度の濃い調査ができた。

第三部の後半では、遣明使の往路に沿って項目を立てながら、現地調査の成果を配置してある。臨場感をもって読んでもらえるように、写真も多く掲げた。まず、旅の前提となる船と航海技術をとりあげたあと（各論⑥⑨）、兵庫から五島までの日本国内の旅程と幕府による警固体制を論じ（各論⑦⑧）、入港地寧波の地理と迎接体制を見た（各論⑨⑩）。寧波から始まる運河の旅については、杭州をはさんで浙東運河と京杭運河に分け、遣明使の旅の苦勞を偲んだ（各論⑬⑭）。入明記等遣明使の表むきの史料には現れない陰の側面である暴行事件にもふれている（各論⑯）。

このほか、寧波文人との密度濃い交遊（第四部各論①）、絵による旅日記ともいうべき伝雪舟作品（同各論⑥）、使節行のハイライトだった紫禁城での肅拝儀礼（第六部各論⑦）、日本にはない科挙の制度・文化に対

する遣明使の強い関心（第四部総説）などについても、他の箇所でもとりあげている。

*

古代の遣唐使（と遣隋使）には、外交使節を通じて中華文明を学びつつ自己形成する日本、という日中双方にとって快い歴史像^{イメーჯ}があり、日中友好という政治的目標にも貢献する主題であった。これに対して、日明外交および遣明使は、冊封という唐代にはなかった要素が——多分に形式上とはいえ——加わり、より深化した関係のもとに生じた。にもかかわらず、これまでは「勘合貿易」という経済面のみ集中しがちで、遣唐使ほど魅力ある研究対象とは見なされてこなかった。

本書では、勘合貿易を現代歴史学の視点から見直し、経済のみでは語れない多面的な要素を発見する一方で、遣明船が垣間見せる、なまぐさい人間関係にも支えられた多彩な文化交流の姿や、当時としてはまな海外旅行と異文化体験という側面にも目をむけ、学際的なアプローチを試みた。というより、遣明船が学際的アプローチを必然的に要求する学問的興奮にみちた研究対象であることを示そうとした。本書をひもといて、遣明使と旅の苦楽をもにしていただければ幸いである。

村井章介

sample

目次

はしがき..... 村井章介 (1)

本書掲載地図一覧..... (16)

本書掲載表一覧..... (16)

凡例..... (17)

第一部 通史と研究史..... 1

●総論Ⅰ● 遣明船の歴史——日明関係史概説——..... 村井章介・橋本 雄 3

●総論Ⅱ● 研究史と史料——遣明船を研究するために——..... 伊藤幸司・須田牧子 40

《各論①》 遣唐使船と遣明船との違い..... (16)

《各論②》 唐・宋・元に渡った僧侶たちと入明僧..... (16)

《各論③》 日元通交との連続面・断絶面..... (16)

《各論④》 中世日本の銅銭輸入の真相..... (16)

《各論⑤》 明代史の展開と対外関係..... (16)

《各論⑥》 高麗・朝鮮の遣中国使節..... (16)

《各論⑦》 最末期の遣明船..... (16)

第二部 遣明船に乗った人々

総説

伊藤幸司

111

《各論①》 堅中圭密

130

《各論②》 宗金一族

134

《各論③》 楠葉西忍

138

《各論④》 天与清啓

142

《各論⑤》 桂庵玄樹

147

《各論⑥》 雪舟等楊とその流派——入明僧を中心に——

151

《各論⑦》 取龍

157

《各論⑧》 了庵桂悟

161

《各論⑨》 宋素卿

166

《各論⑩》 湖心碩鼎

170

《各論⑪》 策彦周良

176

《各論⑫》 神屋一族

181

《各論⑬》 居座・土官——貿易事務官たち——

185

《各論⑭》 通事

190

《各論⑮》 医者

195

第三部 遣明使節の旅

総説

須田牧子

199

《各論①》 『笑雲入明記』——宝徳度船の旅日記——

211

《各論②》 『唐船日記』——楠葉西忍の昔語り——

216

《各論③》 『戊子入明記』——応仁度船の準備記録——

219

《各論④》 『壬申入明記』——永正度船の嘆願書集——

224

《各論⑤》 『初渡集』・『再渡集』

230

——天文八・一六年度船の旅日記——

230

《各論⑥》 船としての遣明船

240

《各論⑦》 瀬戸内海・博多・五島列島

245

第四部 遣明使節の異文化接触

総説

《各論⑧》 遣明船警固衆……………	253
《各論⑨》 航海技術と季節風……………	256
《各論⑩》 寧波と舟山群島……………	261
《各論⑪》 寧波における迎接体制……………	265
《各論⑫》 明代の「駅」管理と地方行政制度……………	270
《各論⑬》 浙東運河……………	274
《各論⑭》 京杭運河……………	279
《各論⑮》 南京・北京の会同館……………	293
《各論⑯》 遣明使節が起こした暴行事件……………	303
《各論⑰》 寧波の乱(寧波事件)……………	307
《各論⑱》 朱統——王命に殉じた酷吏……………	312

《各論①》 寧波文人と遣明使の交流……………	333
《各論②》 五山僧と教養……………	339
《各論③》 肖像贊の世界……………	343
《各論④》 墨蹟——妙智院所蔵送別図読解……………	347
《各論⑤》 渡唐天神像と寧波……………	353
《各論⑥》 唐土勝景図巻と国々人物図巻……………	358
《各論⑦》 江浙の寺院……………	360
《各論⑧》 杭州西湖……………	365
《各論⑨》 遣明使と陽明学……………	370

村井章介 321

319

第五部 彼我を行き交うモノ

総説

《各論①》『天文十二年後渡唐方進貢物諸色注文』

——朝貢品をいかに調えるか——

《各論②》馬

《各論③》硫黄

《各論④》屏風・扇

《各論⑤》日本刀

《各論⑥》香料・香辛料・染料・薬剤

《各論⑦》絹織物

《各論⑧》書画

《各論⑨》唐物漆器

《各論⑩》陶磁器

《各論⑪》銅銭

関 周一 377

第六部 外交文書と儀礼の世界

総説

《各論①》『善隣国宝記』——日本初の外交文書集——

《各論②》『嘉靖公牘集』——明役人との交渉文書集——

《各論③》表文

《各論④》勅諭・誥命

《各論⑤》勘合・咨文

《各論⑥》印章

《各論⑦》朝貢儀礼

《各論⑧》冊封儀礼

《各論⑨》外交の装い

——足利義満の冊封に関する服装——

橋本 雄 443

441

本書掲載図版出典一覧……………517

編集後記……………523

執筆者一覧……………527

索引(人名・寺社名)……………左1

sanin

本書掲載地図一覧

明代中国周辺概略図(15世紀を中心に)…………… 2
 高麗時代の使行路…………… 102
 朝鮮時代の使行路…………… 104
 寧波・舟山群島関係図…………… 106
 遣明使節の旅の略図…………… 203
 西日本における遣明船ゆかりの地…………… 246
 舟山群島付近…………… 262
 明代の寧波府城…………… 268
 京杭運河・浙東運河略図(明代)…………… 275
 西湖周辺図(15世紀を中心に)…………… 367

本書掲載表一覧

初期日明関係年表…………… 30
 遣明勘合船派遣一覧…………… 32
 日本への明使節一覧表…………… 34
 遣明勘合船派遣契機・使用勘合・使行内容等一覧…………… 36
 足利義政期以降の遣明船団構成の変遷一覧…………… 39
 策彦入明記録並送行書画類…………… 63
 遣明使初期、明人の題跋・著賛・塔銘…………… 132
 『戊子入明記』所収文書一覧…………… 221
 会同館に配置された小通事(成化五年(一四六九)段磨)…………… 298
 遣明船の硫黄と硫黄使節一覧…………… 398
 『御物御画目録』にみえる画人名…………… 415
 遣明船による錢貨輸入一覧表…………… 439
 明応度遣明使節候補者の変遷…………… 457
 形態情報のわかる日本・琉球国宛の明代詔勅…………… 477
 日本現存の明代誥勅…………… 481
 冕服の章数と配置…………… 513
 朝鮮国王と琉球国王の常服比較…………… 514
 宣徳帝頒賜染織品のうち品級を示す常服料一覧…………… 515